



日溜まりの人々
岩井接骨院

高橋フミ子

日溜まりの人々

岩井接骨院

高

橋フミ子

表紙：ぱくたそ

大雄山線、和田河原駅から西に向かって二つ目の信号を左に折れると、直ぐに、岩井接骨院の白い大きな看板が目に入る。

道路から外玄関迄は、年輩者や体の課動力に問題のある人にとっては助けになる、優しいスロープで結ばれている。

そのスロープの回りには接骨院のスタッフが、丹誠に育てた小さな花々が、四季折々に患者を迎える。

外玄関の道路側には、四、五メートルに成長したトネリコの葉の波が、キラキラと小さな小さな小波を、光と風にゆだねている。

内玄関に入ると、待ち合いホールがある。

正面に受け付けがあり、その奥には、スタッフが患者を治療する姿が垣間見える。

内玄関の右手は、テレビジョンを中心としたソファが、治療の時間を待つ人々の休みの場を作っている。

玄関に入った患者に受け付けの早川さんが

「お早うございます」

と声をかけると、奥のフィーリングルームから、若いスタッフの声が、多少の時間の差を持って、「お早うございます」とやって来た患者に挨拶を送る。

この患者を迎える挨拶の時間の差は、スタッフの一人一人が訪れる人への心遣いを示すための岩井院長の気持なのだ。

受け付けを済ませ、治療室に入り入口の右手の四台の丸い椅子で順番を待つ。

治療室の左手に、ホットパックのコーナーがあり、それは患部を温める。

ホットパックの効用は、患部を温める事で体を柔らかく、血流を図り、免疫力を高める。

次に、四台の丸い椅子の正面に、等身大の薄い布団が四枚、並んでいる。

その布団に俯せに寝ると、若い先生は、体の右、左、と体を揺すり骨を調整する。

その治療は、バランスあるいはほぐしと、呼ばれている。

バランスが終ると、先生方は患者の荷物を持って次の治療を待つ椅子へ案内する。岩井院長の骨組みを整える治療と、スーパーライザーの赤外線照射の治療に分れる。

岩井院長は、院長専用の治療ベッドで、十本の指に全神経を集中させて患者の背骨を辿り、あるいは首の骨を指で探り、その人の痛む場所を計って骨を調整して正しい姿勢へと戻してゆく。

治療の後は、痛みが軽くなっている。

右手を痛みのために動かさないうでいた患者は、治療が終わり、帰るときには、腕を上を持ち上げる事が出来るまでになっていた。

岩井院長の鋭敏な十本の指と同じように骨の上にあてるHERVO-SCOPEという医療器具が用いられる事もあるが、それは神経の温度を測り、温度差が0.3度以上あると神経の圧迫の存在を教えてくれる。

人の苦痛を取り除くことに先生方は専念する。

一つの治療が終わると、次の治療を受けるのを待つための椅子まで、先生は患者のバックや手荷物を持って、優しい言葉で案内する。

どの先生も、優しく暖かい。

岩井信明院長が柔道整復師という道に入ったのは、母親が膝を痛めたのがきっかけになったのかも知れない。

岩井院長が、まだ小学生の頃、母親は膝を悪くした。

その母親が、元気な男の子を五人、育てることは並大抵のことでは無かったはずだ。

痛い、という言葉が無意識のうちに口を出てくる。

信明少年は、痛みのためにぎこちない母の動きが胸に重かった。

母親を楽にしてあげたくて仕事を手伝ってみたが、それはたかが知れていた。

しかし、ある日、母親は、子供たちのセーターを、古くなったから廃品に出す事にするわ、と納戸の片隅に置いた。

信明少年は、その古いセーターをじっと見つめて、以前、痛い、という母の膝にそっと触った時に、母の膝は、ひんやりとしていたことを思い出した。

あの冷たかった膝を暖めたら、どうだろう、少年は思った。

熱が有る時に、母さんは氷で冷やしてくれた。それなら、痛くて冷たい膝を、暖めたらいいのではないかと考えた。

信明少年は、セーターを手を取った。

そして、母の洋服箱を借りると、はさみを取り出し、セーターの袖を切った。

セーターの袖の肩先と袖口を合わせて二重にし、その中に綿を入れて、その上下にゴムを通して...それが、母さんの痛い膝を暖めて、守ってくれる。

そうしたら、母さんの膝の痛みはなくなるだろう、と信明少年は思った。

やがて、信明少年の七才年上の兄が大学校へ通いながら柔道整復師の専門学校へも入校していた。

兄が家で包帯の巻き方を練習しているのを真似てみたのだが、当の兄よりも、信明少年の方が上手だった。

信明少年も兄と同じ柔道整復師を学んでみたが、やはり兄よりも技術が上手だったため、自分には、その仕事が合っているのかも知れない、と思った。

子供の頃、母親の膝の苦痛に胸を痛め、何とか楽にしてあげたいとセーターの袖で綿入りのサポーターを作った事も、包帯の巻き方も、治療の仕方も兄よりも優れている事を思うと、柔道整復師としての道がふさわしいのかも知れないと、この道を選んだ。

そして四十年、この道を確認したのだ。

柔道整復師の道に行く若者たちが目指す場所に立っている。

鈴木静江さんは97才。

鈴木静江さんを見るだけでは、とても97才とは信じられない。

若々しい顔色、記憶も確かで、話す口調もしっかりと迷いが無い。

そして、明るく、人懐こい人だ。

鈴木静江さんは、友人と一緒に岩井接骨院を訪れた。

鈴木静江さんは、友人と並んでホットパックの治療、次にバランス（ほぐし）の治療を受けた

。

鈴木静江さんにバランスの治療を施した、西村先生は、ニコニコと暖かく鈴木さんのバックと鈴木静江さんの手を取って、院長に診てもらいましょうと、指定の銀色の椅子に連れて行った。

「院長先生、鈴木さんは97才なんですよ」

静江さんの友達は、院長専用の診療ベッドに横になる鈴木静江さんを見ながら言った。

院長は、高齢者や体調の重い人に特に同情心や憐れみを示す人なので、鈴木静江さんとたちまち友達のように親しくなった。

鈴木静江さんは、院長の診療の後、中山裕樹先生にスーパーライザーの治療を受ける。

静江さんは、両足首の膨らみが気になっていた。

「これ、使いすぎですね。大丈夫、すぐに治ります。ほかに痛い所とか気になる所ないですか」

「腰や背中が痛い」

中山裕樹先生は、静江さんの洋服をめくろうとしたが、なかなか上手に下着を上げられなかった

。

「何枚着てるんですか...一枚、二枚...。六枚も着てる。これ、着すぎですよ」

明るい中山先生の声に鈴木静江さんは気持ちが楽になった。

接骨院に通いだして数日後、鈴木静江さんは夜中に自宅で転んでしまって、背骨を折ってしまった。

それから、五か月間 静江さんは自宅治療を受けた。

中山祐樹先生、寺山雄三先生、榊原宏人先生、飯尾幸大先生が、二人組で毎日に治療に通った

。

先生方は、静江さんを労わりながら親切であくまでも優しく、静江さんの心をもほぐしていった。

ある日、静江さんは、治療を受けるためベッドから、降りようとして四つん這いになったところ、大きなおならをしてしまった。

それは、中山先生の前で、みんな驚いたけど一番驚いたのは静江さんで、みんな大笑いしたけれど一番笑ったのも静江さんだった。

この場合笑うしかないのも確か。

静江さんは、岩井接骨院の先生たちに心を癒されていった。

中山先生は、患者の体を理解し的確な治療をほどこしていた。

また、患者の気持ちをほぐす会話も上手だ

今、ここで治療を休んだら元に戻ってしまいますか、と心配そうに尋ねる患者に「何月までに治しますから頑張ってください」と、力強い安心感を与えてくれる。

榊原宏人先生は優しい、気づかいの人で治療をしながら健康の根本的な必要を教えてくれる。体を冷やすことが健康にどんなに悪いか、体を冷やさないために何ができるか等親切に教えてくれた。

榊原先生が柔道整復師を仕事として選んだのは、友達の影響で自分に合っていると思ったと淡々と話す。

涼やかな表情で。

目もとがはっきりと少年のような爽やかな、飯尾幸大先生はしっかりと丁寧に診てくれる。

治療していてふと青あざが目につくと、あとが固くなるからとあざの治療もしてくれる。小さなことにも気を使って患者の最善を考えているように感じられる。

鈴木静江さんが、眼鏡の先生と親しんでいた寺村雄三先生は毎日通院してくる患者をサイバー9000で、治療するとき、何時もは電流の強弱を患者に確かめて治療を始めるが、ある日何の質問もなく治療を始めた。

肌に感じる電流はいつもより強かった。しばらくして

「痛くないですか？大丈夫？」

「はい」

「では、これで、やっていきます」

つまり、寺村雄三先生はこの程度なら我慢できるだろうと、前もって電流の強さを確かめておいたのだ。

早く、元気にしてあげたくて・・・。

仕事において、力強い先生だ。

唯一、女性の佐々木先生はさすがに優しい細やかな気づかいと親切。

親しみの持てる先生だ。

飯尾先生が柔道整復師に関心を持ったのは、野球をして何度か怪我をして治療に通っているうちに、体について知りたいと思ったのがきっかけだった。

中山裕樹先生が、柔道整復師の道を選んだのにも理由があった。

彼が高校二年生の夏休みのことだった。

ソフトボウルの練習試合の時、彼は左肩を脱臼してしまった。

部活の監督は、中山少年を車で岩井接骨院に連れて行った。

車で走る途中、道路のわずかな段差や整備の行き届かない道路から生じる揺れに中山少年の肩に激痛が走った。

普段は何も感じない車の揺れ具合なのに、耐え難い痛みだった。

痛がる中山少年を、岩井信明院長は、暖かく穏やかに迎え、肩に手を触れられるのも嫌がる

のを、優しく励ましながら治療を施した

すると、あれほどの痛みがまるで嘘のように消えたのだった。

部活は、一か月休む必要があったが、傷ついた左肩を労わりながら、生活は普通にできた。

あれほどの痛みを一瞬のうちに治す治療法が或ることと、岩井先生の優しさと、的確な治療法に中山少年は心を大きく揺さぶられた。

あの痛み...わずかな振動にも息が出来ないほどの痛みが、瞬く間に癒えた感動は中山少年が今まで抱いていた幾つかの希望を見事に破壊してしまった。

中山少年は、人の痛みを取り去る、呼吸もできないほどの痛みを取り去る...これこそ人を助ける道だと思った。

この道を行きたいと思った。

岩井先生の道を自分も行きたいと思った。

中山少年は脱臼の後の肩のケアが終わると高校の部活の後、岩井接骨院に通い柔道整復師の手ほどきを受けることにして、毎日接骨院に通った。

中山少年の両親は、そんな子供の将来に不安を持った。

両親にとって柔道整復師という仕事は、まったく未知の世界で親として子供の将来はもっと別の道を考えていた。

子供が今、希望している道は子供の将来の生活に幅と深みを備える、確かな力となるのだろうか...不安であった。

しかし、学業の後欠かさず接骨院に未知の仕事の修得に通う、子供の姿に一応許さざるを得ないと思った。

不安はあったけれど、子供がこれほどに信頼を置く、岩井信明院長に子供を預けることにした。

両親から理解を得た中山少年は、ホッと、力を得ることができた。

自分を理解してくれた両親への感謝と、自分も経験した痛みからの解放の喜びを、ぜひ人々にも感じてほしいと、柔道整復師の技術を少年は極めていった。

やがて中山少年は、国家資格を勝ち得て岩井院長のもとで柔道整復師として力をふるう立場を得た。

或る患者が予約カードに飾り模様を入れているのを見た中山先生は

「かわいい、ほかの患者さんにもこうしてあげたいな」

と、言った。

そういう言葉が出るということは、中山先生が岩井信明院長を信頼し、尊敬しているのだと、また、岩井接骨院を誇りの思っていると、だから、患者のことも大切に思うことができている、と感じられた。

鈴木静江さんは、岩井接骨院の治療室に入ると院長の背中をポンとたたく。

すると、院長も鈴木静江さんをポンとたたく、それが鈴木静江さんのあいさつだ。

それから中山先生、寺村先生、飯尾先生、榊原先生から治療を行ける。

鈴木静江さんは、先生たちの暖かさと優しさに包まれている。

今、岩井接骨院に中山裕樹先生と寺村雄三先生は、不在、それぞれ柔道整復師としての技を強めるための道を歩いている。

鈴木静江さんは、その二人の先生のことをとても懐かしそうに語られる。

「眼鏡の先生、元気かねえ」

眼鏡の先生は寺村先生のこと。

そして、中山先生には時々会うことができている。

鈴木静江さんは、中山先生を息子のように、恋人のように思っている。

そばで見っていてとても、ほほえましい。

体が痛くなるからということとは勿論だが、飯尾先生の治療が大好きで、そして、先生方から元気をもらう、と鈴木静江さんは岩井接骨院に通うことを楽しみにしている

鈴木静江さんは、現在98歳。

鈴木静江さんにとって岩井接骨院の先生たちは、陽だまりのような人々。

日溜まりの人々ー岩井接骨院

<http://p.booklog.jp/book/76151>

著者：高橋 フミ子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/jwkokoro/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/76151>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/76151>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ